

月に開花し淡桃色の5弁花をもち、花径は大きく5 cm 程度のものであった(図1)。これは父島のムニンノボタンの記載と一致しない。このため、戦前父島に自生していたムニンノボタンの再発見につとめ、戦後母島で発見されたものとの形態の差異を明確にすることと、母島のものは花弁がすべて5枚であるのかを確認することとした。

1968年から1970年にかけて父島に在島していた筆者は、中央山から初寝山にかけての台地状の地域を精査したところ、1969年の12月、中央山東側の道路沿いで、リュウキュウマツとヒメツバキの幼木に埋れていた、ムニンノボタンの小株を2株程みつけた。周りの被圧木を伐開しておいたところ、再発見後4年目の1973年9月初旬、数個の着花を見た。花は白色の4弁花で、花径4 cm 程度、樹高は1 m に満たない株状の小低木であり、早田氏の命名されたムニンノボタンの記載とびったり一致するものであった。さらにその後の調査によって、旧武田牧場附近において1株が確認された。周囲の枝条を伐開しておいたところ、4年程過ぎた1979年の8月下旬になって、数個の開花をみた。この株の花も前の株のものと同様、白色の4枚の花弁をもった花径3~4 cm のものであり、樹高も1 m 程度で、全体にやや柔らかい毛が密生している。

ノボタン属の花の花弁数は変化しやすいといわれるが、母島では、乳房山南方の小ピークと、界岳から石門山への稜線で自生地が見つかったが、花弁はすべて5枚で、4弁のものや6~7弁のものは全くなかった。母島産と父島産のものを比較してみると、表1のような差異が認められ、明らかな違いがあるのでムニンノボタンの変種、ハハジマノボタンと名づけて報告する。この他、北硫黄島に自生しているノボタン属の植物は、琉球に分布するものと同一種のノボタン (*Melastoma candidum* D. Don) であると報告されている(小野幹雄・小林純子, 小笠原諸島自然環境現況調査報告書, 1982)。なお、戦前兄島において自生の記録があるが、これまでの数回行われた調査によってはまだ発見されていない。

***Melastoma tetramerum* Hayata var. *pentapetalum* Toyoda, var. nov.**

Planta 1.5-2 m alta. Flores 4-5 cm diam., pentapetali, lilacini. Stamina 10. Capsula ca 2 cm diam.

Hab. Isls. Ogasawara, Hahazima, Chibusayama, 400 m alt., in sunny herpages (T. Toyoda s. n., July 15, 1969, type in TI). (国立林業試験場実験林室)

□ Moore, D. M.: *Flora Europaea: checklist and chromosome index* 423 pp. 1982. Cambridge University Press, Cambridge. ¥17,670. これは *Flora Europaea* の最後の巻として発行されたものであって、全植物(シダ植物以上の全管束植物)のリストである。と同時に全欧州からレポートされた植物の染色体数とその産地と原記載をこめて記載してある。たとえば *Epipactis helleborine* (L.) Crantz では Skalińska et al.

(1961) から Uhríková a Pesáková (1978) までの 3 つの報告によって、36, 38, 40, 44 の 4 通りを述べており、記載が正しいか否かについては後考を期している。大部分の染色体は載っているが *Centaurea* L. などは *C. pannosa* DC. から *C. spinabadia* Bubani ex Timb.-Lagr. まで 1 ページ以上も載っていないが、これは報告がなかったものである。いずれにせよ全欧州産の全植物とその染色体数がほぼわかるということは染色体数が数えられ始めた頃を考え合わせると今昔の感に絶えないことである。

(前川文夫)

□Goldblatt, Peter: **Index to plant chromosome numbers 1975-1978.** 553 pp. 1981. Missouri Bot. Garden, St. Louis. ¥5,980. これはたった 4 年間の染色体数の報告である。少しは数が減ったかと思っていたが、480 ページを越えるとは驚きである。Dr. R. J. Moore が健康上の理由で引退し、カナダの Ottawa の Biosystematics Research Institute から U. S. A. のセントルイスのミズーリ植物園に移され、将来はそこから続報ができる筈という。Dr. Moore は 1968-1970 を *Regnum Vegetabile* Vol. 68 (1970) に出し、引きつづいて 1971-1974 を同誌 Vol. 96 に出したものの続報である。藻類 (5 頁半)、菌類 (1 頁)、蘚苔類 (8 頁)、シダ類 (10 頁) を除いて大部分は顕花植物であって、単、複、合弁、離弁を一括して科、属、種をすべて ABC 順とし、配偶体と孢子体の二系、並びに引用文献の著者名と年号を掲げている。*Sonchus asper* の如きは 10 ぐらいの異なる文献が挙がっているが、キク科に 70 頁、マメ科に 58 頁、イネ科に 64 頁もさいており、文献は末尾に 75 頁もついている。たった 4 年間であるが、*Paeonia peregrina* が  $2n=20$  であったり、*Sinowilsonia henryi* が  $2n=24$  だったり、搜がすと中々興味がある。

(前川文夫)

□Lobban, C. S. & M. J. Wynne (ed.): **The biology of seaweeds.** 786 pp. 1981. Blackwell Scientific Publications, Oxford. 約 ¥28,800. さきに出版された A. R. O. Chapman (1979) の同名の書が、細胞レベル、個体レベル、個体群レベルおよび群落レベルといったように、異なる階層から見て海藻を理解する方向で記述されている (拙訳、海藻の生物学、共立出版 K K, 1981) のに対し、今回の書は第 1 節 構造と生殖、第 2 節 生態、第 3 節 生理と生化学、第 4 節 利用となっており、そしてそれぞれの分野で対象を扱う方向をとっている。例えば第 1 節には紅藻、褐藻および緑藻の各植物の形態と分類および生活史の 7 章があり、第 2 節には地理的分布、光条件、栄養、個体・個体群・群落および形態と環境の章が盛り込まれている。執筆者は総勢 26 名で、各章末には豊富な文献が掲載されている。海藻研究の最新の成果や研究の動向を知るのによい本である。

(千原光雄)